

～出エジプト記を読んで感じること～ (12) キャリアウーマン シフラとプア

ヨセフはファラオの夢解きをして、宮廷でファラオに次ぐ最高位に抜擢され、国益を高めるため活躍をしました。もちろんエジプトの記録には彼の名前はないようです。飢饉のため助けを求めてエジプトに来たヨセフの兄弟たちをヨセフは受け入れ、ヤコブも死ぬ前にヨセフに会いたい一心でエジプトにやって来ました。彼らはヨセフの配慮でエジプトのゴシェンに住み、働き始めました。

やがて、族長たちの物語から 400 年を過ぎた頃には、イスラエルの民はエジプトで奴隷として働かされていました。しかし、数も増えてきましたので、エジプトからは警戒されてきました。



〈プアとシフラ ファラオを拒む〉

Sallie Clinton Poet

粘土こね、れんが焼き、農作業などの重労働に酷使され、いずれも過酷を極めました。しかし虐待されればされるほどイスラエルの人々は増え広がったので、エジプト王・ファラオはヘブライ人の助産婦、シフラとプアにこのような命令を出しました。

「お前たちがヘブライ人の女の出産を助けるときには、子どもの性別を確かめ、男の子ならば殺し、女の子ならば生かしておけ」(出エジプト 1:16)

この命令を受けた助産婦シフラとプアは

「いずれも神を畏れていたので、エジプト王が命じたとおりにせず、男の子も生かしておいた」(出エジプト 1:17) とあります。

このことを知った王は問いたしますが、シフラとプアは

「ヘブライ人の女はエジプト人の女性とは違います。彼女たちは丈夫で、助産婦が行く前に産んでしまうのです」(出エジプト 1:19)

と嘘の答えをして、ファラオに逆らうのです。

そのおかげで、民は数をまし、甚だ強くなったとあります。

ヘブライ人である助産婦の二人の女性が強大な権力者ファラオに逆らったとは信じられない出来事です。けれども、出エジプト記の最初の部分に、二人の助産婦による権力への抵抗が記されているのです。シフラとプアの行為は、ある学者は、「歴史上最古の市民による不服従の記録」、また、「圧政下の、最古の、強力なレジスタンスの例」と見なしています。命を守ることを使命とした、勇気ある二人の助産婦の姿に感動します。

助産婦と言えば、ヤコブの妻「ラケルが産みの苦しみをしているとき、助産婦は彼女に、『心配ありません。今度も男の子ですよ』と言った(創 35:17)」とあり、また、ユダの嫁タマルの出産の時も助産婦が手伝っていて、双子が生まれています。(創 38:28-29) ちなみにラケルの2度目の出産は、「逆子による難産」であったと看護師をしておられた友人が看破されました。助産婦は赤ちゃんが足から出てきたから「男の子と分かった」とのことです。逆子だったため、ラケルは難産となり、命を落とすことになったのです。

侍女、娼婦も女性による最古の職業の一つでしょうが、助産婦の仕事は古代から女性の専門職であったし、それなりの地位もある重要な仕事だったのではないのでしょうか。女性の出産は命がけと言われていますから、この仕事をするには高く評価されていたのです。ファラオも助産婦に従わざるを得なかったのでしょうか。それでも、ファラオは弾圧の手をゆるめませんでした。